



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title 論文題目	精神障害者における自己開示尺度の開発
Author(s) 著 者	横山 和樹
Degree number 学位記番号	甲第 27 号
Degree name 学位の種別	博士（作業療法学）
Issue Date 学位取得年月日	2015-09-30
Original Article 原著論文	
Doc URL	
DOI	
Resource Version	

博士論文の内容の要旨

保健医療学研究科 博士課程後期 理学療法学・作業療法学専攻 精神障害リハビリテーション学分野	学籍番号 氏 名	12DO04 横山 和樹
論文題名（日本語） 精神障害者における自己開示尺度の開発		
論文題名（英語） Development of self-disclosure scale for people with mental illness		
<p>目的</p> <p>自己開示は「自分がどのような人物であるのかを他者に言語的に伝える行為」と定義され、一般的に自己開示をしている者ほど、自尊感情や親和動機、主観的健康感を高めている。しかしながら、精神障害者の中には、精神症状と障害に加えて偏見や差別を理由に自己開示を避ける場合も散見される。そのため、精神障害の影響を考慮した項目を持つ独自の評価尺度が求められる。本研究は精神障害者の主観的体験から自己開示を捉え、“精神障害者における自己開示尺度”を開発することを目的とした。</p> <p>方法</p> <p>研究デザインは混合研究とした。研究 1 として、地域で生活する精神障害者 18 名を対象に、理論的サンプリングによる半構造化インタビューを実施し、自己開示の経験を聴取した。データ分析は質的データ分析法（佐藤，2008）を参考に、精神障害者における自己開示の構成概念および関連要因を検討した。次に研究 2 として、精神障害者 150 名を対象に、精神障害者における自己開示尺度（試作版）、自尊感情尺度、親和動機尺度、Link ステイグマ尺度、主観的健康感評価尺度の 5 種類の自記式評価尺度を実施した。精神障害者における自己開示尺度（試作版）は、研究 1 で得た自己開示の構成概念と文献レビューを参考に開示内容を 30 項目設定し、身近で重要としている人物および初対面の人物に対する自己開示の量・深さをそれぞれ 5 件法で問うものとした。再テストとして、27 名を対象に試作版尺度を 2 週間後に再実施した。データ分析では、自己開示の量のデータを探索的因子分析（主因子法、Promax 回転）にかけ、試作版尺度の項目を整理した。その後、自己開示の量と深さの内的整合性を Cronbach</p>		

の α 係数を用いて検討した．基準関連妥当性は，試作版自己開示尺度と他尺度との相関を Spearman の順位相関係数で検証した．再テスト信頼性は，再テストとの相関を ICC で検証した．なお，倫理的配慮として，札幌医科大学倫理委員会の承認，研究協力施設と対象者の同意を書面で得た．

結果

研究 1 では，精神障害者の自己開示の構成概念は 30 個のコードで示され，人の生活に共通する“人間としての自分”と，精神障害者独自の文化的背景や生活領域を反映する“精神障害者としての自分”に分類された．また，精神障害に特異的な自己開示の関連要因として，セルフスティグマの形成，不安定な精神状態，相手に差別される感覚などが挙げられ，自己開示を抑制していた．一方で，適切な自己開示が相手に受容されると，自己の肯定面の発見，精神障害からの回復感などの自己認識の肯定的変化が得られ，“人間としての自分”の開示を促進していた．研究 2 では，探索的因子分析の結果，4 因子構造 23 項目『精神疾患と障害（6 項目）』『生活状況（6 項目）』『自分の強み（5 項目）』『苦悩の経験（6 項目）』を得た．全体および下位尺度の Cronbach α 係数は 0.79~0.94 であった．基準関連に関しては，身近で重要としている人物への自己開示の量・深さは自尊感情尺度，親和動機尺度の親和傾向，主観的健康感評価尺度の心健康度に有意な正の相関がみられた．Link スティグマ尺度については，初対面の人物への自己開示の量・深さとの間に有意な負の相関がみられた．再テストの ICC は自己開示の量（全体）で 0.75，自己開示の深さで 0.70 であった．

考察

精神障害者の主観的体験に基づいた独自の自己開示尺度を開発し，十分な内的整合性，基準関連妥当性，中等度の再テスト信頼性を得た．自己開示の中でも“人間としての自分”の開示が自尊感情や心の健康度などに関連していることから，本尺度を用いて当事者の自己開示を定量的に捉え，自己開示に関する相談支援やリハビリテーション場面にて活用する意義は大きいと考える．精神障害者における自己開示尺度は，自己開示の量と深さの双方を共通の評価方法で測定することが可能であり，精神障害者の自己開示研究を発展させるための有用な評価スケールになり得る．

キーワード

精神障害者，自己開示，セルフスティグマ，混合研究，尺度開発

Purpose

Self-disclosure is defined as “telling others about the self” and is related to improvements in self-esteem, affiliation motive, and subjective health. However, people with mental illness may avoid self-disclosure because of prejudice and discrimination that frequently goes along with mental illness and psychiatric disability. Therefore, there is a requirement for an original evaluation scale containing items that investigate the influence of mental illness on self-disclosure. The purpose of the present study was to develop a self-disclosure scale for people with mental illness by exploring their subjective experience of self-disclosure.

Methods

The research reported here consisted of two studies and employed a mixed methods design. Study 1 utilized qualitative analyses. Using theoretical sampling, we selected 18 participants who were “people with mental illness living in the community”. These participants reported their experiences of self-disclosure by completing a semi-structured interview. Data were analyzed using qualitative data analysis (Sato, 2008); we examined constructive concepts and relevant factors for self-disclosure in people with mental illness. Study 2 employed quantitative analysis and 150 participants completed: (1) the self-disclosure scale for people with mental illness (original), (2) Rosenberg’s self-esteem scale, (3) questionnaires on affiliation motives, (4) Link’s devaluation-discrimination scale, and (5) the subjective well-being inventory. The self-disclosure scale for people with mental illness (original) consisted of 30 items constructed with reference to concepts of self-disclosure from Study 1 and a literature review. The scale asked about amount and depth of self-disclosure to the closest person and a stranger rated on a 5-point scale. A retest was conducted (two weeks later) with 27 participants. We analyzed the data using exploratory factor analysis (principal factor method, promax rotation) with the degree of self-disclosure used to determine the factor structure of the scale. After initial analysis, internal consistency of the amount and depth of self-disclosure was assessed using Cronbach’s α coefficient. Criterion validity was examined by calculating Spearman’s correlation coefficients between scores on the self-disclosure scale and scores on the other four scales. Test–retest reliability was examined by calculating intraclass correlation coefficient (ICC) between first and second scores on the self-disclosure scale. The research was approved by the Sapporo Medical University Ethical Review Board and with the agreement of the research partnership facilities and all study authors.

Results

In Study 1, self-disclosure of people with mental illness was shown by 30 conceptual items. And the items classified in “oneself as the human being” defined as the life of person in common and “oneself as people with mental illness” defined as their original cultural background and life domains. The factors relevant for self-disclosure in people with mental illness were inhibitory and revealed as “the formation of self-stigma”, “unstable mental condition”, and “the sense of being discriminated against by the other.” However, when appropriate self-disclosure was received by the other, the participants sometimes experienced positive changes in self-awareness such as “the discovery of one’s positive aspects” and “a feeling of recovery from mental illness”; this made it possible to promote disclosure of “oneself as a human being.” In Study 2, exploratory factor analysis revealed a four-factor structure with 23 items: “mental illness and psychiatric disability” (6 items), “living condition” (6 items), “strength of oneself” (5 items), and “experience of distress” (6 items). Cronbach’s α coefficient for the total score and subscales of the self-disclosure scale ranged from 0.79-0.94. The amount and depth of self-disclosure to the closest person significantly and positively correlated with Rosenberg’s self-esteem scale, “affiliative tendency” of questionnaires on affiliation motives and “the degree of mental health” of subjective well-being inventory. The amount and depth of self-disclosure to a stranger was significantly and negatively correlated with scores on the devaluation-discrimination scale. Test–retest reliability for the amount of self-disclosure was ICC=0.85 and the depth of self-disclosure was ICC=0.70.

Discussion

The present research developed a self-disclosure scale for people with mental illness based on their subjective experiences. The scale was evaluated according to its reliability and validity. Importantly, self-disclosure of “oneself as a human being” was related to self-esteem and to the degree of mental health. It is therefore important that we measure the self-disclosure of people with mental illness using a validated scale and that we utilize counseling about self-disclosure in the context of psychiatric rehabilitation. The self-disclosure scale for people with mental illness can measure the amount and depth of self-disclosure using standardized methods. Thus, the scale could have utility for the study and treatment of self-disclosure issues in people with mental illness.

Keywords

People with mental illness, Self-disclosure, Self-stigma, Mixed methods research, Scale development

- 1 論文内容の要旨は、研究目的・研究方法・研究結果・考察・結論等とし、簡潔に日本語で 1,500 字程度に要約すること。併せて英語要旨も日本語要旨と同様に作成すること。
- 2 2 枚目からも外枠だけは必ず付けること

博士論文・修士論文審査の要旨及び担当者

報 告 番 号	第 27 号	氏 名	横 山 和 樹
論 文 審 査 担 当 者	主 査 教授 池田 望 副主査 医学部神経精神医学講座教授 河西 千秋 副主査 教授 古名 丈人 教授 松山 清治 教授 中村 眞理子		
論文名 精神障害者における自己開示尺度の開発 Development of self-disclosure scale for people with mental illness 自己開示は「自分がどのような人物であるのかを他者に言語的に伝える行為」と定義され、一般的に自己開示をするほど自尊感情や親和動機、主観的健康感が高まるとされる。しかしながら、精神障害者の中には、精神症状と障害に加えて偏見や差別を理由に自己開示を避ける場合も散見される。そのため、精神障害の影響を考慮した項目を持つ独自の評価尺度が求められる。本研究は精神障害者の主観的体験から自己開示を捉え、“精神障害者における自己開示尺度”を開発することを目的としたものである。 研究デザインは混合研究であり、研究1として、地域で生活する精神障害者18名を対象に、理論的サンプリングによる半構成的インタビューを実施し、自己開示の経験を聴取した。データ分析では質的データ分析法（佐藤，2008）を参考に、精神障害者における自己開示の構成概念および関連要因を検討している。研究2として、精神障害者150名を対象に、精神障害者における自己開示尺度（試作版）、自尊感情尺度、親和動機尺度、Linkスティグマ尺度、主観的健康感評価尺度の5種類の自記式評価尺度を実施した。精神障害者における自己開示尺度（試作版）は、研究1で得た自己開示の構成概念と文献レビューを参考に開示内容を30項目設定し、身近で重要としている人物および初対面の人物に対する自己開示の量・深さをそれぞれ5件法で問うものとした。再テストとして、27名を対象に試作版尺度を2週間後に再実施した。データ分析では、自己開示の量のデータを探索的因子分析（主因子法、Promax回転）にかけ、試作版尺度の項目を整理した。その後、自己開示の量と深さの内的整合性をCronbachのα係数を用いて検討した。また、基準関連妥当性として試作版自己開示尺度と他尺度との相関、再テスト信頼性として1回目と2回目との相関をSpearmanの順位相関係数を用いて検証した。倫理的配慮として、札幌医科大学倫理委員会の承認、研究協力施設と対象者の同意を書面で得ている。			

研究 1 では、精神障害者の自己開示の構成概念は 30 個のコードで示され、人の生活に共通する“人間としての自分”と、精神障害者独自の文化的背景や生活領域を反映する“精神障害者としての自分”に分類された。また、精神障害に特異的な自己開示の関連要因として、セルフスティグマの形成、不安定な精神状態、相手に差別される感覚などが挙げられ、自己開示を抑制していた。一方で、適切な自己開示が相手に受容されると、自己の肯定面の発見、精神障害からの回復感などの自己認識の肯定的変化が得られ、“人間としての自分”の開示を促進していた。研究 2 では、探索的因子分析の結果、4 因子構造 23 項目『精神疾患と障害（6 項目）』『生活状況（6 項目）』『自分の強み（5 項目）』『苦悩の経験（6 項目）』を得た。全体および下位尺度の Cronbach α 係数は 0.79~0.94 であった。基準関連に関しては、身近で重要としている人物への自己開示の量・深さは自尊感情尺度、親和動機尺度の親和傾向、主観的健康感評価尺度の心健康度に有意な正の相関がみられた。Link スティグマ尺度については、初対面の人物への自己開示の量・深さとの間に有意な負の相関がみられた。再テストとの相関係数は、 $\rho=0.56\sim0.79$ ($p<0.01$) であった。

精神障害者の主観的体験に基づいた独自の自己開示尺度を開発し、十分な内的整合性、基準関連妥当性、再テスト信頼性を得た。自己開示の中でも“人間としての自分”の開示が自尊感情や心健康度などと関連していることから、本尺度を用いて当事者の自己開示を定量的に捉え、自己開示に関する相談支援やリハビリテーション場面にて活用する意義は大きい。精神障害者における自己開示尺度は、自己開示の量と深さの双方を共通の評価方法で測定することが可能であり、精神障害者の自己開示研究を発展させるための有用な評価スケールになり得る。

以上の研究内容について、当該院生より平成 27 年 4 月 14 日に開催された論文審査会において報告され、各論文審査委員から、自己開示の量と深さの定義の明確化、サンプリング方法の明記と限界の提示、尺度開発における解析方法の選択理由の明記、基準関連妥当性および再テスト信頼性の基準の明示、性差および疾患差の明示、その他研究限界の文章表現等に関して修正を要するとの指摘を受けた。その後、これらの指摘を踏まえて修正を行った結果、審査員より修正内容は適切であると判断された。以上より、本審査委員会として、本論文は博士（作業療法学）の学位論文に値すると最終的に判断した。

※報告番号につきましては、事務局が記入します。